

犬猫幼齢動物の販売日齢に関する科学的知見について（追記）

中央環境審議会動物愛護部会（第46回）でリストアップした科学的知見について、要約が掲載されていなかった文献について要約を追記する。

1. 犬（一部の文献は猫も含まれる）

（1）譲渡時の年齢が成犬の攻撃及び回避行動の発生に及ぼす影響について

「Homing age influences the prevalence of aggressive and avoidance-related behaviour in adult dogs. Olli Jokinen, David Appleby, Sofi Sandbacka-Saxénc, Tuulia Appleby, c, Anna Valrosa, *Applied Animal Behavior Science*, 195, p87-92, 2017」

【要約（仮）】

フィンランドで、家庭的環境で母犬とともに飼育された犬(3689頭、227犬種、1～16歳)について、譲渡された日齢(6-7週、8週、9-12週、13-16週)と譲渡先での攻撃及び回避行動の関係性をインターネットで集めたアンケートから調査した結果、8週齢を過ぎてから譲渡された犬が問題行動を示す頻度は、8週齢または8週齢未満で譲渡された犬より高いことが示された。総体的にみて、家庭環境で育てられた仔犬を譲渡するのに最も適切な週齢は8週以内であることが示唆された。

（2）2つの異なる年齢で同胎犬から分離された犬の飼い主により報告された

行動の発生率について

「Prevalence of owner-reported behaviours in dogs separated from the litter at two different ages. L. Pierantoni, M. Albertini, F. Pirrone, *Veterinary Record*, October 29, 2011」

【要約（仮）】

イタリアで、動物病院を通じて集めた140頭の犬(分離された日齢(30～40日齢・70頭、60日齢・70頭)、18ヶ月～7歳、混血種が7割、ペットショップ経由が半数)について、分離された日齢と問題行動の関係性を電話で調査した結果、30～40日齢の個体群の方が60日齢の個体群より問題行動を示す割合が高かった。また、30～40日齢でペットショップから購入された犬は、60日齢でペットショップから購入された犬よりも、問題行動の一部が高い割合だったことから、母犬と同胎犬からの早期分離は、特にペットショップでの飼育と組み合わせられる場合に、仔犬が後年に新しい環境条件や社会的関係に順応する能力に影響する可能性がある。

（3）早期に分離された子犬及び子猫の心的外傷と放棄への介入について

「Interventions for early puppy and kitten trauma and neglect. Overall KL, *Advances in Small Animal Medicine and Surgery*, 30(3), 1-3, 2017」

【要約（仮）】

新しい神経生物学的知見に基づき、母犬等からの引き離し日齢が5～6週と8週で比較した場合、5～6週の方が問題行動が大きかったという知見から、少なくとも8週齢まで、仔犬は母犬の家で同胎犬と一緒に飼育され、母犬に接触できることを義務付けるべきである。また、仔犬、雌犬および母犬は、過度なストレスおよび恐怖のリスクを最小限に抑える状況に常に置かれるべきである。

(4) ペットショップを通じて販売され、

さらに/または、商業的な繁殖施設で生まれた犬への行動的・心理的な効果について

「Behavioral and psychological outcomes for dogs sold as puppies through pet stores and/or born in commercial breeding establishments : Current knowledge and putative causes. Franklin D. McMillan, *Journal of Veterinary Behavior* 19, 14-26, 2017」

【要約 (仮)】

公表されている犬の飼い主を調査した7つの研究データから、ペットショップを通して販売された犬およびまたは大規模な商業的な繁殖施設で生まれた犬では、その他の供給元、特に非商業目的のブリーダーからの犬と比較して、成年期のさまざまな望ましくない行動の頻度が高いことが示唆された。この主な要因としては、遺伝的要因、発達早期の刺激剥奪(不十分な刺激暴露、不適切な社会的暴露または社会的暴露の欠如)、ストレス(出生前母体ストレスおよび出生後成長期の困難)、早期離乳および母子分離、輸送およびペットショップ関連要因、犬の知識や経験不足、ペット犬への献身度の違い等といった飼い主関連の要因が挙げられる。

(5) スペインにおける犬の家族に対する攻撃行動：臨床所見と関連要因

「Canine aggression toward family members in Spain: Clinical presentations and related factors. Susana Le Brech, Marta Amat, Tomás Camps, Déborah Temple, Xavier Manteca, *Journal of Veterinary Behavior* 12, 36-41, 2016」

【要約 (仮)】

スペインの動物病院において、家族に対する攻撃行動が認められた犬 43 頭と過去に攻撃行動を示したことの無い犬 50 頭について、譲渡時の年齢(0~7週齢、7~12 週齢、12 週齢以降)で比較したところ、7 週齢以前に引き取られた犬は、家族に対する攻撃行動を示す傾向が高かった。

2. 猫

(1) 早期離乳による猫の攻撃性及び常同行動の増加について

「Early weaning increases aggression and stereotypic behaviour in cats. Milla K. Ahola, Katariina Vapalahti, Hannes Lohi, *Scientific Reports* 2017」

【要約 (仮)】

フィンランドで、猫(5726 頭、40 種)について、離乳日齢(8 週未満、8~9 週、10~11 週、12~13 週、14~15 週、16 週~1 歳、成猫になってから、全く離乳していない)と問題行動の関係性をインターネットで集めたアンケートから調査した結果、早期離乳(12 週未満)の猫は攻撃性を示す傾向にあること、晚期離乳(14 週以降)猫の方が攻撃的行動や常同行動を示す割合が小さいことが見出されたこと等から、早期離乳(12 週未満)が猫の行動に悪影響を及ぼす可能性があることが示された。